

体験報告：国立台湾師範大学における中国語学習

竹田健二*

Kenji TAKEDA

A Report on My Experience of Studying Chinese in National Taiwan Normal University Mandarin Training Center

要 旨

台湾フェローシップへの申請が採択された筆者は、2013年3月から8月までの半年間、国立台湾大学哲学系において海外研修を行った。台湾フェローシップ採択者には、国立台湾師範大学国語教学中心において3ヶ月間中国語を学習する機会が与えられることから、筆者はこの機会を利用してあらためて中国語を学習した。本稿は、その体験についての報告である。

【キーワード：中国語、国立台湾師範大学、国語教学中心、台湾奨助金】

1. はじめに

筆者は、2012年に台湾フェローシップへの申請を行い、幸いにも採択されたことから、2013年（平成25年）3月から8月までの半年間、国立台湾大学哲学系において海外研修を行った。

台湾フェローシップとは、中華民国政府外交部が、台湾・中国に関する研究を行っている海外の研究者を公募により台湾へ招く制度（台湾滞在期間は3ヶ月から1年）である。採択された研究者には、国立台湾師範大学国語教学中心において中国語を1学期（基本的に3ヶ月）無料で学習する機会が与えられる。筆者はこの機会を利用してあらためて中国語を学習した。

本稿は、その時の体験についての報告である。

2. 国立台湾師範大学国語教学中心

国立台湾師範大学国語教学中心は、そのホームページ (<http://web.mtc.ntnu.edu.tw/mtcweb/>) に記載されている情報によれば、中国語を第二言語として学ぶ外国人学生に対して中国語と中国文化を教授する、台湾最大の教育機関である。1956年に設立された同中心には、現在120名以上もの教師が所属し、中国語初学者からビジネスに用いる中国語を習得しようとする人まで、多様な受講生に対応しており、毎学期（3ヶ月）の受講者は、約70ヶ国から来台した1700名に及ぶという。

3. 筆者の中国語学習歴と動機

筆者は、鳥根大学教育学部在学中の1983年（昭和58年）、大学院進学のための中国語学習を開始した。当時、教育学部学生には、一般教養科目として第一外国語（英



図1 国立台湾師範大学国語教学中心のある博愛楼

語)のみ課せられており、筆者は第二外国語をまったく受講していない。このため、当時の筆者の学習方法は、NHKのラジオ講座や市販のテキストを用いての独学で、個人的指導といったものを受けた経験もまったくない。

筆者は1984年（昭和59年）に教育学部を卒業した後、大阪大学文学部中国哲学研究室において、研究生として1年間、大学院の文学研究科博士課程前期（哲学哲学史専攻）の学生として2年間、合計3年間在籍した。筆者が真剣に中国語学習に取り組んだのは、この3年間である。

当時の筆者の学習方法は、やはりほとんどが独学である。但し、中国哲学研究室の先輩や同級生の中には中国語に堪能な人が多く、このため時に彼等から個人的指導を受けた。

当時筆者が中国語を学習した理由は、中国哲学関係の演習の授業において、現代中国語での音読ができることと、現代中国語の文章を読解することとが求められたためである。

* 鳥根大学教育学部言語文化教育講座

すなわち、筆者の専門分野である中国哲学関係の授業に、当時は二つの演習があった。いずれも加地伸行教授が担当されていたのであるが、そのうちの一つは『周易正義』を読むものであった。この授業の中で加地先生は、文言文（中国古典文）で記された『周易正義』を現代中国語音で音読することを受講生に課された。具体的には、授業ではまず担当者の学生が担当箇所の本文や注疏を訓読によって読み、その後先生と担当者とを中心に質疑応答を行う。質疑応答が終わると、最後に発表者は、本文や注疏を現代中国語で音読しなければならなかった。

もう一つの演習は、現代中国語で記された任継愈の『中国哲学史』を読むもので、こちらの演習では、担当者はまず担当箇所を中国語で音読し、続いて現代日本語に翻訳する。その後、加地先生との質疑応答を行うのである。

学部学生時代に漢文を訓読で読むことしかしておらず、前述の通り中国語の授業も受けたことがなかった筆者は、こうした演習に対応するために、中国語を学習しなければならなかった。

特に力を入れて取り組む必要があったのは、現代中国語による音読である。日本語には無い中国語の発音（例えば、「zh」・「ch」・「r」などの子音）や声調（「四声」という）などを習得することは筆者にとって大変難しかった。研究室の先輩等から個人的指導を受けたというのも、専らそれらの習得のためであった。

このように、筆者の中国語学習は、あくまでも中国哲学の授業において求められたことに対応するためのもので、要するに音読と読解の学習であった⁽¹⁾。このため、中国語の会話に関してはほとんど学習していない。これは中国哲学や中国文学、東洋史を専攻する一般的な学生の中国語学習と比較して、かなり偏った学習であったといっておくべきであろう。

筆者の指導教員である加地教授もそうした点を憂慮されたようで、筆者が修士課程を修了して就職するにあたり、中国へ短期留学に行くことを強く勧められた。そこで筆者は、1987年（昭和62年）2月から3月にかけての4週間余り、中国・北京語言学院（現・北京語言大学）に自費で短期留学した。

北京語言学院において受講したのは「初級口語」（初級会話）である。平日毎日午前8時から12時まで行われた授業は、北京語言学院の編集した教科書に基づき、中国人のP教師が中国語のみを用いて進めるというものであった。受講生は、日本人が6名、他にドイツ人と香港人の合計8名であったと記憶している。

この時に受講した授業が、筆者が生まれて初めて受講した、中国語そのものを学習するための正規の授業である。短期とはいえ初めての留学でもあり、筆者は生活面を含めて大いに刺激を受け、意欲的に中国語会話の学習に取り組んだように記憶している。帰国する時点で、一応初級レベルの会話は何とかできるようになった。この時の北京語言学院での経験は、今回の筆者の国立台湾師

範大学国語教学中心における中国語学習にも大いに役立ったと感じている。

もっとも、短期留学から帰国した後、筆者は研究上の必要から中国語の論文や著書の読解は継続して行ったものの、中国語会話の学習はほとんど行っていない。就職してからの十数年の間には一度も中国に渡航する機会がなく、中国語を用いて会話する機会もほとんどなかった。

ところが、1998年（平成10年）に郭店楚簡の研究に取り組み初めた後、状況が大きく変化した。

郭店楚簡とは、1993年（平成5年）に中国湖北省荊門市の郭店一号楚墓から出土した戦国時代の竹簡資料のことである。戦国時代の典籍が発見されたのはこれが初めてで、郭店楚簡の竹簡の写真と釈文とを収めた『郭店楚墓竹簡』が1998年に文物出版社から出版されると、各国の中国古代思想研究者は挙って研究を開始した。また、上海博物館も1994年（平成6年）に戦国時代の竹簡資料（上博楚簡）を入手し、2001年（平成13年）からその公開が始まった。更に21世紀に入ると、湖南大学や清華大学、北京大学などが戦国時代・秦代・漢代の竹簡資料を立て続けに入手した。これらについても現在公開が進行中である。

こうして90年代後半以降相次いで新出土資料が出現し、その研究が急速に進んだ結果、従来の古典のみに基づく中国古代思想史の定説は見直しを迫られることとなった。同時に、各国において出土文献研究に関連する国際学会が多数開催されるようになった。

筆者も2003年（平成15年）以降、台湾や中国などで開催される国際学会において研究発表を行う機会を得ている。もっとも、筆者は中国語の会話力に自信がなく、筆者にとって初めての国際学会での発表である『「日本漢學的中國哲學研究與郭店，上海竹簡資料」國際學術交流會』（2003年12月に台湾大学哲学系で開催）、及び2回目の「上博簡與出土文獻研究方法學術研討會」（2004年4月に台湾大学東亜文明研究中心で開催）では、口頭発表を日本語で行い、通訳の協力を仰いだ。

この2回の台湾大学での筆者の発表は、台湾大学哲学系の佐藤將之助理教授（現・副教授）の尽力により実現したのだが、筆者に中国語学習経験があることを知った佐藤氏は、中国語圏の研究者が多数集まる国際学会では中国語で発表の方がよいと筆者に強く勧められた。そこで筆者は、3回目の国際学会での発表（台湾・政治大学で開催された『「出土簡帛文獻與古代學術」學術研討會』、2005年12月）以降はできるだけ、発表原稿を予め中国人の知人に中国語へ翻訳してもらい、学会ではそれを読むという形で研究発表を行うことにしている。

もっとも、筆者の会話能力では、発表後の質疑応答の際に、中国語でやりとりすることが極めて困難である。このため筆者は近年、あらためて中国語会話を学習する必要性を強く感ずるようになっていた。

4. 台湾フェローシップへの申請と受講前の手続き

2012年（平成24年）4月の初め、筆者は台湾フェローシップへの応募を促す書類を入手した。この時筆者は台湾フェローシップの存在を初めて知り、にわかに興味を抱いたのだが、台湾フェローシップに関する詳しい情報が他に得られず、採択される可能性がどれほどあるのかもまったく見当が付かなかった。このため、すぐには応募を決意できずにいたのだが、5月上旬、翌年の3月から8月までの半年間台湾に滞在する計画で申請することを決意した。その時点で筆者は、もしも採択されたならば、台湾で中国語会話の個人指導を受けようと考えた。但しこれは、あくまでも心積もりに過ぎず、指導者の人選などの具体的な準備はまったくしていない。

筆者は申請書類一式を整え、同年7月、提出先として指示された台北駐大阪経済文化弁事処に送付した。その結果、幸いにも筆者の申請は採択された。採択を知らせるeメールが届いたのは10月29日のことである。

筆者が渡航の準備を開始する中、12月3日、台湾フェローシップ関係の連絡業務等を担当する漢学研究中心という組織から筆者のもとに、一通の問い合わせのメールが届いた。台湾フェローシップ採択者全員に送付されたそのメールには、台湾フェローシップ採択者には国立台湾師範大学国語教学中心において1学期（3ヶ月）無料で中国語を学習する機会が与えられるが、あなたは受講を希望するか、というものであった。

筆者は台湾フェローシップの採択者にそうした機会が与えられることをまったく知らなかった。また、台湾師範大学には行ったことがあったものの、国語教学中心についてはほとんど何も知らなかった。急な話に大変驚いたのだが、北京語言学院での短期留学の経験から、師範大学で行われる正規の授業を受けるならば、間違いなく中国語の会話能力を向上させることができるであろうし、また個人的に中国語会話を指導してくれる人物を探す手間も省くことができると考え、受講を決意した。

12月3日に受け取ったメールには、受講を希望する場合は12月28日までに「入学申請単」（入学申請書）や「学生言語背景資料調査表」（中国語学習に関する学習状況等に関する調査書）等の必要書類を提出するように、との指示があった。「申請単」を作成するに当たり、筆者が考えなければならなかったのは、コースの選択と学期の選択とである。

コースについては、授業が1日2時間の「普通班」（Regular Course）か、1日3時間の「密集班」（Intensive Course）か、どちらかを選択しなければならなかった。筆者は両者の違いがよく分からないまま、「密集班」を選択することとした。「密集班」は授業が1日3時間であることから、授業日が少ないのではないかと想像したのである。しかし、この想像は完全に間違っていた。筆者は国語教学中心での授業が始まった後、「密集班」も「普通班」も毎日授業がある点では同じで

あることを知ることとなる。

学期については、3月6日～5月28日の春学期、6月3日～8月21日の夏学期、7月1日から8月21日のSummer Session、9月上旬～11月中旬の秋学期、12月上旬から翌年2月の冬学期の5学期の中から選択するように、との指示があった。筆者の台湾滞在期間は、3月から8月までであったため、選択可能な学期は春学期・夏学期・Summer Sessionの三つであった。夏学期とSummer Sessionとは、いずれも筆者の台湾滞在期間の後半に当たることから、筆者は台湾滞在期間の前半にあたる春学期を選択した。

その後、2013年（平成25年）2月6日にまたメールが届き、3月6日に始まる春学期への入学希望者は、2月21日・22日に師範大学に入学して登録する必要があると知らされた。筆者は本務の都合上、2月末までに台湾に渡航することができなかった。このため、筆者は漢学研究中心にメールを送り、師範大での登録を3月上旬の渡航以降にしてもらえるかどうか問い合わせを希望しと依頼した。最悪の場合は登録手続きの遅れが認められず、受講を断念せざるを得ないかもしれないと大いに不安を感じていたのだが、幸いにも渡航後直ちに登録すればよいとの回答が得られた。

筆者は3月4日に台湾に到着した。翌3月5日の午前中、先ず国立国家図書館内にある漢学研究中心を訪問し、台湾フェローシップに関する事務的な手続きを行った。手続きは午後2時過ぎにようやく終了し、その後直ちに国立台湾師範大学国語教学中心に移動、受講のために必要な手続きを行った。

国語教学中心では、先ず事務室において入学に当たっての事務的な手続きがあり、それが終わると筆者は別室に案内され、15分程度の中国語による面談を受けた。担当者による質問の内容は、筆者の中国語学習歴の確認が中心であったように思う。その後、今度はパソコンルームに案内され、30分程度の試験を受けた。試験はパソコンを用いたもので、ディスプレイに示される文章を読解して解答する問題と、ヘッドホンを通して聞く中国語を聞き取って解答する問題とであったように記憶している。解答の形式は、いずれも選択式で、記述式ではなかった（概ね3択だったように思う）。

試験終了後、面談を受けた部屋に戻り、もう一度短い面談があり、その場で筆者の所属するクラスが決定された。面談を行った担当者は、面談と試験の結果に基づいて筆者の中国語の水準を判定し、その上で筆者の希望する受講時間帯（午後の授業を希望していた）との調整を行い、筆者のクラスを決定したと推測される。

5. 国語教学中心における授業

（ア）クラス

筆者の属した「密集班」のクラスは、受講生が合計7名（筆者を含む日本人4名、アメリカ人2名、韓国人1

名)であった。クラスメートはほとんどが20代若い留学生で、筆者がもちろん最年長であった。担当教師のJ教師は、国語教学中心での教職歴が5年前後の、比較的若手の教員であった。

前述の通り、筆者はコースとして「密集班」を選択するに当たり、3日3時間の授業があることから授業日が「普通班」より少ないのではないかと勝手に想像していたのだが、授業が始まった後、両者は毎日授業がある点では同じであることを知った。

国語教学中心では、「密集班」に入るか「普通班」に入るかは、基本的に受講生自身が選択するが、両者は授業料に差がある。1学期(3ヶ月)の授業料は「密集班」が32,400台湾ドル、「普通班」は25,200台湾ドルで、「密集班」の方が高い。⁽²⁾また、師範大学と交流協定を結ぶ海外の大学からの交換留学生の場合、「密集班」を選択しなければならないそうである。このことを筆者は、交換留学生であるクラスメートの韓国人から聞いた。従って、筆者の属した「密集班」の受講生は、筆者を除き、授業時間数が多く、かつ学費の高いクラスを自ら進んで選んだ者と、交換留学生とからなっていたわけである。一般に、「密集班」受講生の方が「普通班」よりも学習意欲が高いと見てよからう。クラスメートから聞いた話では、「密集班」の方が授業時数が多いだけではなく、授業の進度も速いそうである。また「密集班」の方が1クラスの受講者数が少ないとも聞いた。

授業時間に関しては、一般に台湾の大学の授業時間は授業50分+休憩10分を1コマの単位とし、通常の授業の場合は2コマ連続、つまり授業は100分で、間に10分の休憩がある、という形で行われる。筆者が台湾滞在中に出席した台湾大学哲学系の授業もそうした形で行われていた。「密集班」の1日3時間の授業は、授業50分+休憩10分を3コマ連続で、また「普通班」の1日2時間の授業は2コマ連続で行うものであった。

「密集班」も「普通班」も、授業は月曜日から金曜日まで、祝日を除く毎日行われた。このため「密集班」の1週間の授業時間数は合計15時間、「普通班」は合計10時間である。但し、「普通班」の受講生には、授業とは別に週5時間、大学内において補習を行うことが義務づけられていた。これは近年始まった制度とのことだったが、制度変更の理由は分からない。「普通班」の受講生は、指定された部屋で自習したり、或いは担当教師との面談を行ったりしていたようである。筆者は、国語教学中心内の図書室に滞在時間を管理するためのタイムカードのような機械が設置されていたのを見た。

授業の進捗については、筆者の所属した「密集班」のクラスでは、使用した教科書1冊の全14課を3ヶ月の1学期の間にすべて終えるというペースで授業が進められた。これは筆者の予想をかなり上回る速さで、このために筆者は、毎日の予習や課題に或る程度時間をかける必要があった。「普通班」は1学期で教科書1冊のおおよそ半分程度進むペースであると、クラスメートから聞いたことがある。

たことがある。

受講生数については、「密集班」の受講生数は5~8名で、8名の上限を超えることはなく、「普通班」は6~10名、とのことであった。「密集班」は徹底した少人数編成であるが、日本における一般的な中学校・高等学校の英語の授業、或いは大学の外国語の授業と比べると、どちらもかなり少人数でクラスが編成されていると見てよからう。

(イ) 教科書

筆者のクラスで使用した教科書は、『新版实用視聽華語4』(国立台湾師範大学主編、正中書局、2008年)である。同書は、音声を入れたCDが附属するものと附属しないものとが販売されており、筆者はCDの附属するものを、最初の授業の開始直前に学内で購入した。また、この教科書にはセットとなる『新版实用視聽華語4学生作業簿』(国立台湾師範大学主編、正中書局、2008年)があり、指示に従ってこちらも購入した。『学生作業簿』とはワークブックのことで、筆者の所属した「密集班」では専ら「功課」(宿題)に用いられた。

『新版实用視聽華語4』は全14課で構成されており、各課は概ね(ア)本文、(イ)「生詞及例句」(新出語と例文)+「専有名詞」(固有名詞)、(ウ)注釈(英文)、(エ)文法練習(中文・英文による解説と練習問題)、(オ)課外活動、(カ)短文、からなる。

筆者が国語教学中心において受講する前、最も心配していたのは、漢字音(漢字の読み方)を示す発音記号として、注音符が教科書などに用いられているのではないか、という点である。

注音符とは、中華民国で一般に用いられる発音記号で、日本の片仮名のように、漢字の一部を切り取る形で作られたものである。台湾の小学校で用いられている教科書などには、漢字の読み方を示す注音符が、ルビのように漢字に付されている。中華人民共和国においては、アルファベットによって漢字の読み方を示す拼音(ピンイン)が用いられ、注音符は用いられていない。日本における中国語学習では、一般に拼音が用いられ、筆者も拼音で中国語を学んできた。このため、国語教学中心で注音符が用いられているならば、先ず注音符を理解するための学習が必要となり、面倒なことになると筆者は思っていたのである。

ちなみに、筆者が台湾滞在中使用した携帯電話は、販売店にあった最も安価な機種だったが、その携帯電話でショートメールを送る際は、拼音で漢字入力することができず、注音字母で漢字を入力しなければならなかった。なお、クラスメートの使用していたスマートフォンは、拼音でも漢字入力が可能とのことであった。

国語教学中心で使用した教科書『新版实用視聽華語4』は、幸い基本的に拼音が用いられており、注音符はほとんど用いられていなかった。国語教学中心での授業が始まってからおよそ一ヶ月後、筆者はJ教師に対して、

教科書に注音符号ではなく拼音が用いられている理由を尋ねた。するとJ教師は、国語教学中心には世界中から学生が来ており、彼らの多くはそもそも漢字を知らないため、漢字の一部を切り取って作られた注音符号では分かりにくいからだ、と説明してくれた。

(ウ) 授業の内容

J教師は第1回目の授業の冒頭で、先ず学期全体の学習計画表を配布した。これは、3ヶ月間の学期の大まかな予定を示したもので、詳しいことは、以後毎週配布された、一週間ずつの学習計画表に示されていた。前述の通り、筆者の所属した「密集班」では、3ヶ月の1学期の間に1冊の教科書全14課をすべて終えたが、J教師はおそらく、1学期3ヶ月間で14課を終えるところから逆算して、各週の学習活動や学習内容を計画したと推測される。

各週の学習計画表に記されていたのは、「上課」(毎日の授業)・「功課」(宿題)・「預習」(予習)・「考試」(テスト)の四つである。

「上課」として記されていた、毎日の授業における学習活動は、①「課文予習単」(各課の内容についての予習カード)の解説、②教科書の(イ)「生詞及例句」、及び(エ)文法練習を中心とした文法等に関する解説、③功課(宿題)の解答・解説、④「生詞」を用いた作文・対話、の四つが中心であった。教科書の(ア)本文そのものは、授業内では取り上げられることが無かった。

①の「課文予習単」(各課の内容についての予習カード)とは、教科書の各課の本文の内容に関する質問が記されたプリントである。受講生には「功課」、つまり宿題として、「課文予習単」の質問の答えを授業に臨む前に書いておくことが求められた。もっとも、ほとんどの質問は、教科書の本文を読めば簡単に答えられるものであった。但し、中には受講生の意見を書くことを求めるような、一種の短作文も含まれていた。

授業の中では、J教師が「課文予習単」の質問の答え合わせを行い、必要に応じて文法事項等の解説を加えた。それが終わると、J教師は受講生全員の「課文予習単」を回収し、添削を加えた上で返却した。

②教科書の(イ)「生詞及例句」、及び(エ)文法練習を中心とした文法等に関する解説は、J教師自身が作成したPPTを用いて行われた。J教師は授業の際に、プロジェクターを用いてPPTをスクリーンに投影するとともに、プリントアウトしたものも受講生に配布した。

このPPTには様々な工夫が凝らされており、J教師はこのPPTを用いた解説にかなり力を注いでいたように見受けられた。工夫とは、例えば、空欄の穴埋めを交える、インターネット上の情報をリンクとして埋め込む、イラストや漫画を用いる、といったものである。リンクが張られた情報には、台湾で流行しているポップス(紀曉君が歌う「流浪記」など)のビデオや、比較的新しいテレビのニュースの動画などがあった。J教師はそれらを示

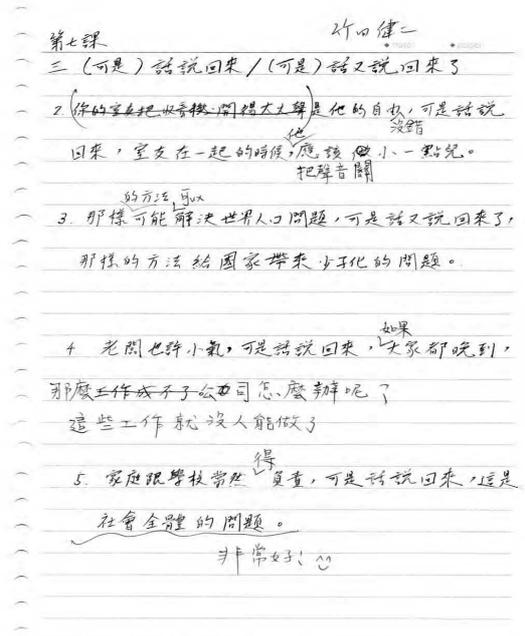
すことによって、台湾の社会で実際に使われている言語表現や台湾社会の実情を受講生に紹介し、その興味や関心を高めようとしたと思われる。そして、その効果は十分にあったと筆者は感じている。

③の「功課」(宿題)は、前述の①で用いる「課文予習単」や教科書の(エ)文法練習、及び『新版实用視聽華語4学生作業簿』から出されることが多かった。①の「課文予習単」だけでなく、「功課」はすべて提出を求められ、J教師は提出されたものをすべてチェックして添削を加え、翌日か休憩時間に返却した。下の図2は、教科書第7課の「功課」として筆者が提出したノートの一部である。J教師が受講生の作文に対して細かく添削を加えていることや、時に受講生を褒めて学習意欲を盛り立てようとしていることなどが見て取れよう。

④の「生詞」を用いた作文・対話は、概ね以下のようにして行われた。(1)初めにJ教師が各受講生に対して、1語ずつ単語が記されたカードを3枚ずつ配る。(2)受講生はカードに記された3語を使って各自作文する(1文でも、複数の文でも可)。(3)受講生は2~3人でグループを作り、互いに自分の作文を発表しあう。(4)J教師は机間巡視を行い、上手く作文できない受講生や、作文に問題がある受講生に対して、適宜必要な助言を与える。(5)受講生は適宜カードを交換し、新たな作文をする。教師が新たにカードを配り直す場合もある。(6)教師が指名した受講生が、自分の作文をクラス全員に向けて発表する。

学期の後半になると、J教師は単にカードを配るだけではなく、或る状況を設定し、その状況にふさわしい作文をすることを受講生に求めた。例えば、二人組となった受講生の一方がスピード違反で捕まったドライバー、一方が取り締まる警官となり、二人の間でありそうな会話を考える、といったものである。

図2 第7課の「功課」として筆者が提出したノート



先述の通り、使用した教科書は全14課で構成され、各課の学習は概ね3～4日で終わるペースで進められたが、各課の学習が終わると、必ず「考試」、つまり試験が行われた。「考試」は必ず、一日の授業の最後の1コマ(50分)である3コマ目に行われた。そして100点満点で評価された答案が、翌日には返却された。正解については、返却と同時に教室内に張り出されたが、特に問題のあったところについて、授業時間内にJ教師が解説することもあった。

「考試」の内容は、聞き取り問題、記述問題、そして面接である。

聞き取り問題は、J教師が先ず3～5分程度の文章を読み、その後内容に関する10の質問を行うもので、解答は2択、或いは3択の形式であった。記述問題は、拼音(ピンイン)で記された単語を漢字にする問題、穴埋め問題、作文が中心であった。面接は、試験時間内に受講生が一人ずつJ教師の待機している別室に行き、J教師の質問を聞き取り、その場で答えるというものである。一人当たりの面接時間は、概ね5分程度であったように記憶している。

この「考試」の面接の時、筆者はJ教師の質問が上手く聞き取れないことがあったが、そうした時にJ教師は、質問を繰り返したり、話す速度をやや落としてくれた。また、筆者の回答を修正することもあった。おそらくこうしたことは、他の受講生に対しても同様であったと推測される。

「考試」の行われない日は、一日の授業の最後の10分のところで、「聴写」という小テストがしばしば行われた。「聴写」とは、教師が読み上げる文章の発音記号と漢字とをすべて書き記す、というものである。「聴写」も100点満点で採点され、翌日返却された。右の図3は、5月3日の筆者の「聴写」の結果である。

筆者の聞き取りには問題があり、正直なところ「聴写」にはかなり苦しんだ。「聴写」の際は、J教師に「請再說一遍。」(もう一度言ってください)と文章の再読を求めることができたのだが、筆者がおそらく最も数多く再読を求めた。また、解答を書き終えた受講生は教室から退出するのだが、最後まで居残ることが最も多かったのも筆者であった。

なお、5月3日の筆者の「聴写」に対して、J教師は92点という評価をつけているが、間違っている箇所は少なくなく、この評価はいささか高すぎるように筆者には感じられる。

前述の「考試」や、後述する作文などについてもそうであるが、J教師が100点満点で評価を行う際の筆者の得点は概ね80点以上で、80点に及ばなかったのは学期前半の数回に過ぎなかった。しかも70点を下回ることは一度もなかった。以下は筆者の推測に過ぎないが、受講生の得点が80点以上になるように、J教師は問題の水準の設定や評価の基準を意図的に操作していたと思われる。おそらくJ教師は、受講生が低い得点のために学習意欲を

失ってしまうことを避け、かつもう一步で100点に届くと、受講生の学習意欲が高まることを期待してそのようにしたのではないかと思われる。

(エ) 特別な課題

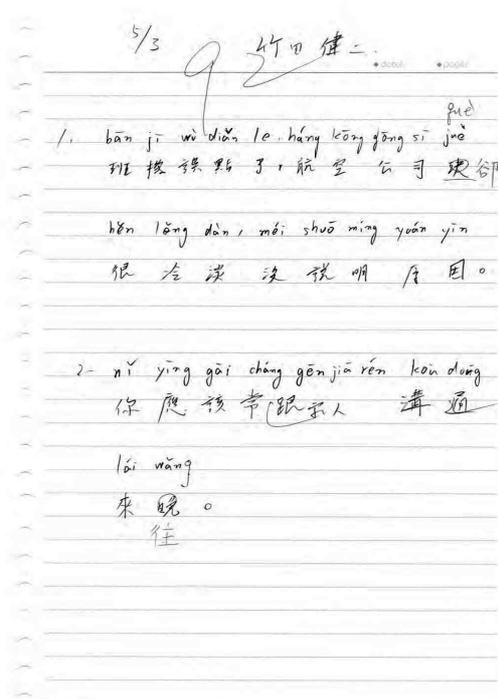
J教師は上述した通常の学習活動の他、受講生に対して特別な課題として、⑤スピーチ、⑥作文、⑦期末報告、⑧期末試験を課した。

⑤のスピーチは、一人5分程度、J教師とクラスメートの前でやるもので、授業開始から2～3週たった頃に始まった(一日1～2人ずつ)。スピーチの内容については特に指示が無く、受講生の興味に応じて選べばよかった。或るクラスメートは、ユーチューブの動画を用いて好きな映画の一場面を示し、自分が何故この映画を好きか、ということスピーチした。筆者自身は、国語教学中心で中国語を学習することとなった理由を中心に、少し長めの自己紹介を行った。

⑥の作文は、学期のちょうど中間あたりに行われた。与えられたテーマは「我的休閒活動」(私のレジャー活動)で、長さは500字弱と指示された。J教師は受験生全員に、提出前に下書きを見せるように、と指示した。そこで筆者が下書きを提出すると、J教師は丁寧に下書きを添削して返却した。その後筆者は、国語教学中心の所定の用紙に、J教師の添削に従って清書し、改めてJ教師に提出した。後日この作文は、J教師のコメントと100点満点の評価が付されて返却された。

⑦の期末報告は、受講生一人一人がPPTを用いて15分程度のプレゼンテーションを行うというものである。

図3 5月3日に行われた筆者の「聴写」



これは「密集班」の受講生のみで課せられるものだとそう、J教師は受講生に「核能発電面面観」(原子力発電の諸相)という共通のテーマを与えた。台湾社会は一般に日本に対する関心が高く、東日本大震災や福島第一原子力発電所の問題もよく知られていた。また筆者が受講していた頃、台湾の国内において原子力発電所の増設が大きな社会問題となっていた。J教師によるテーマの選定は、そうしたことを背景に行われたと思われる。

J教師はこの期末報告に関して、テーマとは別に、二つの条件を受講生に課した。一つは、必ずPPTを作成し、それを見せながら報告を行うこと、もう一つは、台湾人の友人2人以上に原子力発電に対する意見を取材し、それを報告の中に盛り込むことである。

期末報告は通常の授業時間内に教室で行われ、その様子はビデオカメラで撮影された。後日撮影された画像を収めたDVDが、各受講生に配布された。

筆者は、日本における筆者の勤務先が原子力発電所から10kmも離れていないところに位置していることを紹介し、日本と台湾とは原子力発電を巡って共通する課題があることなどを述べた。筆者にとっては、台湾人の友人2人から取材するという条件を満たすことが難しかった。というのも、筆者の台湾人の友人はほとんどが台湾の大学に勤務する教員であり、多忙な彼等を筆者の中国語学習に付き合わせることは避けられたからである。結局、一人は台湾大学哲学系の大学院生に取材することができたが、もう一人は台湾師範大の教員である知人に協力をお願いせざるを得なかった。

⑧の期末試験は、各クラス毎に実施日時が指定された。これはおそらく、試験会場が国語教学中心のパソコンルームであったためであろう。

筆者は、指定された期末試験実施日が、香港での学会発表のために欠席する日と重なった。このため、クラスの中で筆者一人だけが別の日に「補考」(追試)を受験することとなった。以下の述べるのは、筆者が受講期間終了の直前に受けた「補考」についてである。試験の形式や内容は、クラスメートが受けた通常の期末試験と概ね同一であったと思われる。

期末試験の試験時間は約60分であった。問題の内容は、聞き取り、文章読解、そして文章の読み上げがあった。入学時に受けた、パソコンを用いたクラス分けのための試験とはほぼ同様の形式であったが、文章の読み上げは期末試験にしかないものであった。この文章の読み上げについては、通常の授業中にはまったく行っていなかったためか、期末試験を数日後に控えた授業中にJ教師から、読み上げる時にマイクに向かってしっかりと声を出すように、との注意があった。

クラスメートの話によると、期末試験の成績は、次の学期にも連続して受講する場合に、所属するクラスの水準を決める上で意味を持つものであり、80点以上であれば次の学期に1ランク上の水準のクラスに進むことができ、90点以上ならば2ランク上のクラスに進むことも可

能(希望した場合のみ)とのことである。一方、80点に満たない場合は、次の学期に上の水準のクラスに進むことができず、再び同じ水準のクラスでなければならないそうである。

また、これは筆者の想像だが、クラスメートの韓国人のように師範大学に交換留学生として入学して受講した学生は、期末試験の成績に応じて単位が認定されるものと思われる。但し、その場合は期末試験の結果だけではなく、作文や期末報告などの評価も加味される可能性が考えられるが、詳細は不明である。

なお、筆者は「補考」の結果について、特に成績表のようなものは受け取っていない。後日J教師から口頭で、得点(確か100点満点で92点か93点だったと思う)と、筆者が間違った問題は聞き取りであったことを知らされたのみである。もっともこれは、筆者の「補考」が受講期間終了の直前であり、筆者に成績表を渡す時間的余裕がなかっただけのことかもしれない。

筆者は1学期のみ受講し、次の学期は受講しなかったものであり、単位も不要であったから、わざわざ「補考」を受ける必要はなかったように思われるが、久しぶりに試験を受ける側の立場に立ち、大いに緊張感を味わった。得難い経験であったのは確かである。

6. 受講の感想

先述の通り、筆者が国語教学中心で中国語を学習した動機は、中国語で研究発表を行った際の質疑応答ができるようになりたい、というものであった。もとより、僅か3ヶ月間の国語教学中心における中国語学習だけでそれができるようになるとは思っていたわけではなく、また実際に十分にできるようになったという訳ではない。しかし、受講したことにより筆者の中国語会話の能力が向上したという手応えは、強く感じている。同時に、あらためて自らの中国語の聞き取り能力の不足と語彙力の不足を痛感している。聞き取り能力や語彙力を向上させるためには、今後も地道な努力を継続するしかないであろう。

一つ気になった点は、筆者の中国語の発音に関して、3ヶ月の間にJ教師から特に指摘・指導を受けることがなかった点である。これは、筆者の発音に概ね問題がなかったためなのかも知れないが、理由について筆者にはよく分からない。この点について、直接J教師に確認すればよかったと反省しているところだが、国語教学中心が全体として、或いはJ教師が、「密集班」においては細かな発音を矯正することよりも、実践的会話能力の向上に力点を置く、との方針があったためかもしれない、と推測している。

一般に、同じ中国語であると言っても、方言の違いなどから話し手によってその発音に「ばらつき」があることは少なくない。台湾で筆者が日常的に耳にした中国語の発音も、本当に人様々であった。もちろんJ教師のよ

うに美しい発音をする人も確かにいるのだが、台湾社会は全体として、発音の「ばらつき」に関して寛容であるように筆者には感じられた。細かな発音の矯正よりも、会話を成立させることができるようになる点を重視した指導を行うというのは、限られた時間の中で行う外国語学習のあり方として、一つの見識であろう。

国語教学中心における中国語学習を通して筆者が特に感じたことは、水準を揃えた少人数クラスは、語学学習の場として非常に効果的であるという点である。おそらく国語教学中心は、少人数クラスによる語学教育についての豊富な経験と理論とを有しているであろう。国語教学中心に入学する際、筆者が面談と試験とを受けたのも、水準を揃えた少人数クラスを編成するためであったと思われるが、そうした労力と時間をかけるだけのことはある、逆に言えば、そうしなければ効果があがらないものと思われる。筆者が中学校から大学までに受けた英語の授業は、いずれも一人の教師が40名の生徒・学生を相手にしていたように記憶している。そうした形での語学学習には自ずと限界があらう。

少人数クラスの最大の利点は、受講生の実情を教師が細やかに把握し、対応することができるという点であろうと筆者は考える。形式的に少人数であるだけではもちろん無意味であり、教師が受講生の実情を細やかに把握し、その上で適切な指導を行ってこそ、学習の効果があがるものと考えられる。J教師は授業時間内に受講生の言動を観察して適切な指導を行っただけでなく、先に示した図2・3からも分かるように、受講生の提出物に対しても常に細やかに目を通し、いつも修正やコメントの類を多数書き添えていた。すべての受講生に対してそうしたことを毎日繰り返すJ教師の姿に、筆者は大いに感心した。

また、およそ授業一般にあてはまることと思われるが、授業者が授業の中で、受講生の興味や関心を高めるための工夫をいろいろと行うこともやはり大切であると、改めて感じた。J教師が日々の授業に使用するPPTに工夫を凝らしていたことは、筆者の興味や関心を大いに刺激した。

ちなみに、国語教学中心においても、授業評価が行われており、その際筆者はJ教師の指導について高く評価した。筆者はクラスメートからも、J教師の指導について高く評価する声を聞いたことがある。

最後に、半年の台湾滞在中に筆者は、クラスメートのアメリカ人や韓国人と、何度か一緒に食事をしながら中国語で会話する機会を持った。また台湾滞在中、国語教学中心とは別のところでも、アメリカ人の中国思想研究者やベトナム人研究者と中国語で会話することがあった。このように、中国語を外国語として学習した者同士が中国語で会話するという経験は、筆者には初めてのことであったように思う。これは大変興味深い経験であった。もちろん会話が成立したこと自体大変嬉しかったのだが、それだけではなく、外国語学習の可能性といったものを考

えさせられた。外国語を学習することが、その外国語を母語とする人々の他に、その言葉を学習する外国人とのコミュニケーションをも可能にするということは、例えば英語教育に携わっている専門家には言うまでも無いことであろうが、筆者はそのことを台湾において、身を以て知ったのである。

7. おわりに

国語教学中心において中国語を学習している時、師範大に勤めている知人から、師範大に来る若い日本人留学生についての評判を聞く機会があった。知人の話によると、日本人留学生は真面目でよく勉強するとの定評が、かつてはあった。ところが最近、真面目に授業を受けなかったり、教師に対して反抗的な態度をとる者もしばしば見かけるようになった、とのことであった。日本人留学生は日本人だけでなく群れたがる、とも指摘された。

筆者のクラスメートであった3人の日本人留学生は、「密集班」だったためか、皆極めて真面目に中国語の学習に取り組んでいた。また、J教師に反抗的な態度を取ることも一切無かった。しかし、知人の指摘は、筆者にも思い当たる節があった。

国語教学中心の授業がある日、筆者はいつも早めに師範大学に到着するようにしていた。教室ではまだ前の授業が終わっていないので、いつも他の学生と共に、教室が空くのを廊下やロビーで待ちながら予習をしていた。そうした時、他のクラスの日本人留学生が数名でかたまり、大きな声をあげて日本語で談笑している場面を筆者はよく見かけた。彼等は授業に遅刻することはなかったであろうが、小耳に挟む話の内容から、彼等の中国語学習に取り組む姿勢が必ずしも真剣ではないように思えた。

もとより、これは筆者の僅かな体験でしかないのだが、知人の話が当たっているとすれば、それは日本の社会や学校教育の抱える問題と深く関わっているように筆者には感じられた。

注

- (1) 文章の読解に関しては、演習の授業に加えて、修士論文を執筆する際に、先行研究として中国語で発表された論文や著書を読む上でも必要となった。
- (2) 台湾フェローシップ採択者は、1学期に限り授業料が無料であった。